
GOD EATER BURST -Bond under wintry sky-

Tartle

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GOD EATER BURST - Bond under w

int ry sky -

【ZEPHYR】

N7529W

【作者名】

Tartle

【あらすじ】

ジークフリート・メリは、世界初の新型神機の使い手となつた青年。父親である猛者ジークムント・メリとの諍いは絶えないが、戦士としては優秀。そんな彼らに、謎だらけなアラガミであるスルト討伐の依頼が来る。果たして、ただでさえ仲が悪いのに、色々意味でとんでもない強敵を相手にする羽目になってしまった2人の命運やいかに…？　Tartleが送る、親子愛や仲間との絆の大切さを描いた中編戦記小説！！

第0話 世界初の『新型』（前書き）

（注）あらかじめ言つておきますが、メリ親子などは本編には存在しません。

第0話 世界初の『新型』

時は2070年、所は北歐^{ほくおう}フィン蘭^{ラント}ドにあるフ^ンンリル本部地下の第一訓練場。

この日、世界で初めての新型神機^{しんがたじんき}使いが誕生した。

彼の名はジークフリート・メリ。

『ウールヴヘジン』の二つ名を持つフィン蘭^{ラント}屈指^{くじ}の猛者^{もくしゃ}、ジークムント・メリの息子だ。

父親の高名は、息子にもついて回る。

それは時に、息子を苦しめる事だつてある。

これは、^{さむやぢ}寒空^{さんくう}の下で荒れ狂^{あらが}う神に挑^{いど}む、父と子の物語。

第1話 父との苦悶（前書き）

次回以降は、ここに登場人物などの紹介を書き込みます

第1話 父との苦悩

「う~寒いなあ…」」「ビビだ?」

「知らないつすよ。コンパスも狂っちゃいましたし、吹雪で前も後ろもよく見えないつすよ」

ここは、フィンランドの旧ラッピ州の南と旧オウル州の北ポフヤンマー県にまたがる地。この近くはかつては自然豊かな町だったが、いまや荒れ果てて氷原になってしまっている。

2人の男が、そこを彷徨っていた。

このご時世、一般人が出歩く事は禁じられている。アラガミに襲われるからだ。しかしこの2人は、珍しい素材を集めて闇取引で大儲けしようとして意気揚々と出たはいいが、十分な装備もせずに出来たせいでのんな目にあつたのだ。

「あーあ…よく分からないつすけど、何だか眠く…」

「ちょっ…待て!! 眠つたら死ぬぞ!!」

「あー…懐かしのあつたかい太陽が見えるつす…」

「は? 今は曇つてしかもふぶき…」

その時、男の片方は確かに見た。
眩い紅蓮の光を放つ物体を。

よく見ると、それは体長4mはありそうな人のような姿のもので、紅蓮の炎を纏つていて。足を踏み入れた所から、50cm近く降り積もつた雪がジューっと音を立てて一瞬で蒸発している。吹雪で飛ばされてくる雪の塊も、近づくだけで蒸発している。

「あ…あわわ…」

「う~…寝苦しいつす…」

炎を纏つた人型の化け物は、1歩また1歩と歩み寄る。熱風が襲いかかり、フードについていた氷がどんどん溶けて水になる。逃げたい。そう思うが、男は雪に足を取られてうまく進めない。もう片方は、意識が朦朧としている。

と、炎の化け物の顔が変形し始めた。かつて存在した肉食恐竜のような、前に長く突き出た赤黒い顎^{あご}が現れた。

そう。信じがたい事だが、この化け物もアラガミだ。

「たて！」

男は「助けてくれ！」と叫ぼうとしたのだろう。しかし、その最期^{いご}の叫び声も2人の男が咀嚼^{くしゃく}される音も、激しい吹雪の音で搔き消された。

灼熱^{しゃくねつ}

の炎を纏い、吹雪の中だらつと平然と歩き回る、謎^{なぞ}のアラガミ。

その名は。

「ふう……やつぱ室内はあつたかいねえ……」

かつてフィンランドの首都ヘルシンキだつた場所にあるフヨンリル本部に、1人の青年が帰還した。

左手には、楽器を入れていたもののような大きなケースを提げている。ケース表面と上着の背中には、狼を象^{おおかみかた}つたフェンリルの紋章^{もんじょう}が刻印^{じくいん}されている。青年がフードをとると、ぼさぼさの金髪^{きんぱつ}が現れた。その奥には、1対の青い目がある。

「おっ、ジーくんかい？ おかえリチウムの元素記号は『Li』！」

！」

「ヨトウーのおっちゃん、「ジーくん」って呼び方とオヤジギャグやめてほしいんだけど。せめてちゃんと「ジークフリート」って呼んでほしいんだけど」

「はつはつ！ 違うか……」

「違うよ」

今まさに帰ってきたこの青年こそが、世界初の新型神機使いであるジーグフリート・メリだ。

ちなみに、彼に話しかけていた禿^はげ頭のオッさんは、古参^{じんがたじん}の神機使

いであるエリック・ヨトウ一だ。

「あいつが例の『新型』…」

「関わりたくないよね…」

周りの人々が、日々にジークフリートについて話す。しかし、その内容はほとんどが否定的なものだ。

「そうそう、聞いたか？ また民間人の行方不明者が出たらしいぞ」「ホントどうなってるのよ…」

「そういう時こそ、我々がしっかりせねばならん」

ぎょっとする野次馬。後ろには、ジークフリートとほとんど同じ色金髪碧眼の男が立っていた。後ろに流した長めの金髪を、ヘッドバンドで押さえている。その風貌は、あの伝説の傭兵ソリッド・スネークさながらだ。まあ、筆者が似せただけだけど。

彼こそは、『ウールヴヘジン』の一つ名を持つフィンランド屈指の猛者、ジークムント・メリ。ジークフリートの父親だ。

さて、野次馬達は「自分の発言が聞かれたのでは」とビクビクしているが、彼はそんな事気にもしていない様子で、ジークフリートに歩み寄る。

「ジークフリート、今日も得意満面のようだな」

「ああ。何てつたって、俺一人でオウガテイル墮天を3体も…」

「フン。やはりお前では、まだその程度か

「なつ…何だとぉ…！」

「よく聞け。世の中にはオウガテイル墮天よりもはるかに強いアラガミがいる。雑魚敵に感けてる暇があつたら…」

「うるせえヒゲオヤジ…！」

「言つてくれるじやないかドラ息子…！」

「一二チ中毒…！」

「ブー太郎…！」

「分からず屋…！」

「お前方こそ分からず屋だ…！」

ジークムント・メリとジークフリート・メリの親子喧嘩、もはやお

約束の展開だ。

「まーまー、そのへんに支那ソバ…」

「つるせえ！！ あんたは呼んでねえ！！」「黙れ！！ 今はお前の出る幕じゃない！！」

「すみま扇風機…」

「「フンッ！！」

ヨトウ二が仲裁を試みるが一蹴され、2人ともそっぽを向きあつ。こうしてみると、本当に似通つてゐる親子だ。

「ジークムント・メリ、ジークフリート・メリ。両名とも、今回呼ばれた理由は分かるか？」

フェンリル本部の最上階、フィンランド第1ハイヴの内側もその外も一望できる広々としたガラス張りの部屋。ここに全世界のフェンリル支部の頂点に立つ男 グスタフ・アドルフ・ハイインリッヒスが君臨している。

「どうせ『親子喧嘩も程々にしろ』的な事だろ？」

ジークフリートが、うんざりしたように言う。フィンランド本部内でハイインリッヒスにこんなナメた態度をとれるのは、おそらく彼くらいだろう。

「まあ、それもある。確かに君達2人は、優秀な神機使いだ。しかしこの『時世』、協力しなければ確実に世の中から消える」

本部長室のガラス窓の合間に、歴代社長の肖像画がかけられている。それらの目が、一斉にメリ親子を見つめているようだった。

「本部長、『それもある』という事は、本題も何かしらあるのでしようか？」

「おつと、話が逸れていたようだつたね」

ジークムントに指摘され、ようやく気づいたハイインリッヒス。

「実は、君達に折り入つて頼みがある。あるアラガミを討伐してもらえないか？」

ハイインリッヒスは、真剣な面持ちで続けた。窓の外は曇つていて、

太陽は見えない。

「『あるアラガミ』って何だ？」

「これを見たまえ」

窓のシャッターが閉まり、メリ親子から見て右側にスクリーンが下りてきた。そこに映像が映る。偵察部隊の誰かが、ジープのカメラで遠巻きに撮つたものようだ。

だが、親子は見つけた。

雪景色の中に1点だけある赤燃え盛る巨人を。

「な……何だあれは……！？」

撮影者の声が入る。喉の奥から絞り出したような、微かな驚きの声が。

「左側にアラガミだ！！ 本部に撤退するぞ！！」

そのすぐ後に、運転手の声が入る。映像が消えた。シャッターとスクリーンが上がり、部屋に光が戻つてくる。

「……たつたこれだけか……？」

「残念ながらな。そもそもこのアラガミに正面から挑んで、生きて帰つてきた者は1人もいならしい」
ジークフリートは、それを聞いて体が震えた。戦きか武者震いかは、まだ分からぬ。

「本部長、このアラガミの名前は決めてあるのですか？」

「先程つけたさ。北欧神話の終末の日の折に世界を焼き尽くした、あの忌々しい炎の巨人の名を……」

ハインリッヒスが、口の前で組んでいた手を一際強く握りしめた。

その頃、フィンランドの旧中央スオミ県。

ここはかつて県の中心都市で、元祖【贖罪の街】の1つに数えられている。食い散らかされた廃墟の中、2人の新米ゴッドイーターが狩りを終えようとしていた。

「よつしゃあ！… アイスボムゲット！…」

新米の1人がコンゴウ墮天を捕喰して、アラガミバレットを手に入れる。しかし、もう1人の姿が見当たらない。

「あいつ、どこ行つたんだ？ 早くしねえと先に倒しちまうだろ？」コンゴウ墮天が息も絶え絶えなのをいい事に、新米は相棒を探し始めた。

「はあつ…はあつ…」

そのもう1人の新米ゴッドマイターは、相方から少し離れた所を逃げ回っていた。

「何だよ…何なんだよアイツ…！…！」

角を曲がるが、途中まで行つてそこが袋小路だと気づく。振り返る新米だが、次の瞬間には顔がさらに真っ青になつた。

「あわわ…」

紅蓮の炎を纏つた巨人が歩み寄つてくる。

「くつ…来るなあ！…」

戦きながらも、手に持つてゐるロングブレードで反撃する新米。だが、手応えが無い。なぜか？ 斬りつけたはずの刀身が、半分以上溶けて無くなつてゐるからだ。

「どうなつてんだよ…どうなつてんだよお！…」

スタングレネードは、他のアラガミとの戦いで使い果たしてゐる。もう打つ手は無い。

謎のアラガミの顔が、長い顎に変形する。

しかしその時。新米が破れかぶれに振り回してゐた刀身が、謎のアラガミの下顎を直撃した。皮膚（ひづ）が裂け、鮮血（せんけつ）が噴き出る。

「や…やつた…！ 当たつ…」

だが、そこまでだつた。

新米は、一瞬のうちに喰われた。

その直後、謎のアラガミの背中で爆発が起つた。

「ヤロオ…離れろ！… 早く離れろよ！…」

新米のもう片方が、コンゴウ墮天を捕喰して手に入れたアイスボムを撃ち込んだのだ。

3発目を撃ち込まれて、謎のアラガミは逃げ出した。当たった部分の炎は消えていた。

「本部、応答せよーー！ アラガミはほほ殲滅せんめつしたが、ゴッディーターがーー！」

「負傷した」と言いかけ、新米は絶句ぜつくした。

そこについたのは、相棒の両手と彼が使っていた旧型近距離式神機だけだった。

灼熱の炎を纏い、吹雪の中だらつと平然と歩き回る、謎のアラガミ。

その名は、スルト。

- 続く -

第1話 父との会話（後書き）

（注）ここに出てきている人物やスルトは、ゲーム本編には実在しません。あと、フントンリル本部の場所はあくまでこちらの創作です。

第2話 焰帝スルト（前書き）

前回の話もちよつと訂正しました。^{ていせい}

ジークフリート・メリ (Siegfried Meri)

声 - 大塚明夫 (おおつかあきお)

世界初の新型神機使い。25歳。父親であるジークムントと対立する事が多く、周りから冷や冷やされている。

使用神機は新型の可変式（ロングブレード／アサルト／バックラー）の「ノートゥング（Notung）／バルムンク（Balzung）／ドラウピール（Draupnir）」。

ジークムント・メリ (Siegmund Meri)

声 - 大塚周夫 (おおつかちかお)

ジークフリートの父親。53歳。頑固一徹な性格の持ち主。かなり古くから参戦していて、『ウールヴヘジン（Wulvhegin）／ulfhedinn』の二つ名を持つ、フィンランド屈指の猛者。

使用神機は旧型の近接式（ロングブレード／シールド）の「グラム（Gram）／アンドヴァラナウト（Andvarinaut）」。

エリック・ヨトウイ (Eric Jotuni)

声 - 島田敏 (しまだみん)

フィンランド本部に務める神機使い。52歳。ジークムントの同期である古参だが、実力は劣る。オヤジギャグを連発して呆れられているが、これは彼なりのコミコニケーション方法なのだそうだ。使用神機は旧型のスナイパー系神機（ノルスピッシュィ（Norse upsyssy））の「フロッティ（Hrottvi）」。

グスタフ・アドルフ・ハインリッヒス (Gustav Adolf Heinrichs)

声 - 山崎たくみ

ファンリルの本部長。55歳。

スルト (Surtr)

体長4mはありそうな人型の未確認アラガミ。表皮は常に発火しているため、並大抵のものは触れる前に溶けてしまうが、氷属性の爆発系弾が当たると一時的に炎が消える。捕喰する時にはのっぺりした顔が変形して前に長い顎になる。

モデルは「とある魔術の禁書目録」で出てきた『魔女狩りの王』。顎はティラノサウルスをイメージした形で、ザイゴート1体なら一呑みする設定。

第2話 焰帝スルト

「対策については追々話す」

そう言つてメリ親子を帰らせた後で、ハインリッヒスは葉巻で一服してゐる。

「社長、なぜお話し中にはご喫煙なさらなかつたのですか？」
初老の執事 フレデリック・エーデルフェルトが、ガラス製の灰皿を差し出しながら問いかけた。

「何、未来ある若者の健康に被害を出したくないだけだよ」

「旦那様の事です、どうせ別に理由があるのでございましょう？」

ハインリッヒスは、紫煙を燻らせながら灰皿に葉巻の先の灰を叩き落とした。

「大方、『世界初の新型神機使いだから身体に異常があつては事だ』

「というところでしょ？」

骨董品の柱時計が時を刻む音が聞こえる。エーデルフェルトは、一息ついてから続けた。

「その様子だと、図星のようですね」

「悪いかね」

ハインリッヒスが、恰幅の良い体を震わせて笑いながら言つ。14時を告げる鐘の音が、柱時計から鳴り響く。

「我がフェンリル社の…いや、我ら人類の数少ない希望だからな」
タールやニコチンなどを大量に含む煙を吐き出したハインリッヒスの真つ暗な瞳孔は、底知れない闇を湛えているようだつた。

その頃、メリ親子はエレベーターに乗つてエントランスに降り始めていた。

「何度も言つが、目上の方には敬語を使え」

ジークムントが、沈黙を割つて切り出す。しかし、ジークフリートはいつも通り、説教を聞く氣は無い。

「あの**狸爺**にもか？」

「たつ…それをやめると何度も言つたら…！」

「連中は、自分やフェンリル社の利益ばかり考えて綺麗事並べ立てやがる。あの**狸爺**と言い、その腰巾着の老い耄れ執事と言い、慇懃無礼なパツキン兄弟といい、狐目の変人博士と言い、腹の底じやどんな企み隠してゐるか分かつたもんじゃねえ。そんな奴らに敬意を払えと？」

エレベーターの中に、機械音だけがひたすら響く。時折、機械油のにおいが鼻を突く。

「どうせあんただつて、それを知つてゐるのに手も足も出ねえんだろ？」

「黙れ」

「あんたが**臆病者**だから何もできないんだろ？」

「黙れ」

「あんたが**臆病者**なせいでお袋は…」

「黙れと言つてゐるのが聞こえんのか！！」

「お袋が死んだのはあんたが**不甲斐無い**せいだろ…。偉そうにすんな！！」

ジークフリートがジークムントの上着の襟に掴みかかるが、ジークムントはそれを造作も無く投げ飛ばした。ちょうど扉が開いたエレベーターからジークフリートが宙を舞つて、タイル張りのエントランスの床に背中から落ちた。

「お前が一人前の口を利きたいならば好きにしろ。ただし、今よりも強くなれ」

ジークムントは、そう言つて自室へ戻つていった。周囲の人々は、何が起こったのか分からず啞然としている。

「くそおつ…！」

ジークフリートの叫びが、エントランスホールに空しく響き渡つた。

数時間経つた今、ジークフリートは食堂で配給食を食べている。

悩みを打ち明けられる相手もおらず、打ち解けられる相手もおらず、1人イラついていた。

「あー、よつこいしよういち」

ジークフリートの耳に、聞き慣れた濁声だみこゑが飛び込む。隣に座ったのはヨトウ一だ。

「おう！ ただいまイトネリウムの元素き」…

「『M七』だろ」

「……まあ、合ってるね…」

オヤジギヤグの腰を折られて意氣消沈するヨトウ一。だが、配給食のマッシュュポテトやライスレイパ（ライ麦パン）を食べてから、気を取り直して話しかけ始めた。

「お？ 見たところ何か悩んでるようだね？ 恋でも…」

「してない」

「あつそう……もしゃ太…」

「つてない」

「あつそう……ジークムントと喧嘩けんかした？」

フォークで掬すくつていたりハプラト（フインランド風のミートボール）が、急に手が止まった事で容器の中にポトリと落ちる。

「あいつは……あいつは俺にきつく当たるんだ……お袋を守れなかつたくせに、俺に偉そうに説教垂れてやがるんだ……！」

周りの人々は、こちらを気にせず色々と会話をしている。手柄の自慢話、趣味の話、実際にあつた面白おかしい話……

「ジークムントの前で何人死んだか、知ってるか？」

突然、ヨトウ一が真剣な口調と面持ちで話しかけた。

「まして、君はアイツのたつた1人の息子。心配で心配で仕方無いからこそ、あんなに厳しくなってしまったんだ。アイツはな、不器用で感情を表に出すのが苦手なんだよ」

ジークフリートは、ひたすら驚いている。ヨトウ一が普段からは想

像もつかないほど真剣に話している事に。ジークムントが感情を表に出すのが苦手だという事に。

「『大切な家族を守る』そう誓つて、アイツはゴッドマイターになつたんだ。その家族は父親と母親、そしてヒヨルディース　君のお袋さんだ」

そこまで言つて、ヨトウニはリハプラトを噛み碎いてコーヒーで流し込んだ。

「しかし、それも叶わなかつた。住んでいた居住区^{かな}がアラガミに襲われた時に、父親も母親も殺された。どうにか助け出されたヒヨルディースも、君を産み落とした直後に死んでしまつた。負傷による衰弱死だつたよ」

ジークフリートは、ただ黙つて聞いていた。

「君はたつた1人残つた家族。死なせたくないからこそ、自分の持てるすべての技術を叩き込もうと考えているんだろうね」

ヨトウニはそう言い終えてから、コルヴァースティ（フィンランドのシナモンロール）を頬張つてコーヒーで流し込んだ。

「あー、美味^{おい}しかつた（大石勝つた）――！　吉良負けた――！」

いつものジークフリートなら、「何でフィンランド人のあんたが知つてるんだよ」とでもツッコむだらう。

しかし、今回だけは何も言い返せず、身動き^{みじる}一つしないでしばらくその場に座つていた。

それから数時間。もう日は落ちて、辺りは暗くなつていた。

メリ親子は本部長直々の出動指令を受けて、旧カンタ＝ハメ県ハウスヤルヴィでのアラガミを待ち伏せしていた。

ジークムントはじつと息を潜めて、眉^{まゆ}一つ動かさずに標的^{ターゲット}を待ち構えていた。

しかしへジークフリートは、他の事で頭がいっぱいだつた。

いつどうやつて、父親に今までの不品行を詫びようか。そのためにはどう接したらいいだろうか。

しかし、何かが邪魔して強がつてしまい、素直に謝れない。

プライドなんてもうどうでもいい。だから、謝りたい。

ジークフリートがそう願つた矢先、最新型の暗視双眼鏡で眺めていたジークムントが一瞬顔を顰めた。

ジークフリートも、暗闇に慣れきつた眼で見てみる。目の前の光景に異変が起きたのは、確實だつた。

骨のような形骸と戦車のような装甲を持つ巨大なアラガミ クアドリガだ。しかも、冷たげな青白い体の堕天種 クアドリガ堕天だ。

幸い、こちらには気づいていないようだ。ただでさえ強敵を相手にするというのに、強敵がもう1体増えるというのはリスクが大きすぎる。

そう考えた時だ。突然目の前が明るくなつた。

紅蓮の炎を纏つた巨人 今回の標的、『焰帝』の一いつ名を得たスルトだ。

クアドリガ堕天が気づいて、威嚇の吠え声をあげる。突進しないのは、炎が苦手だからだろう。

スルトが駆け出し、ヒヨ口長い腕の先についた左手でクアドリガ堕天の右ミサイルポッドに掴みかかる。高熱に耐え切れず装甲が溶けだし、中の氷結型ホーミングミサイルに引火して爆裂する。スルトの左手が消し飛び、左前腕部の炎が消える。

クアドリガ堕天は苦痛の叫びをあげながら後ろに飛び退き、氷結型ホーミングミサイルと氷結型トマホークミサイルを上に打ち上げた。狙いはもちろん、スルトだ。

だがスルトは、臆する事無くクアドリガ堕天に飛びかかり、右手だけで持ち上げて盾にした。背中に氷結型ミサイルが次々と命中して爆発する。

スルトの顔が変形し、前に長い顎ができる。そして、苦痛に呻くク

アドリガ墮天の頭を一口で捕喰した。

「……あのクアドリガ墮天つて奴……弱いのか……？」

ジークフリートが、恐る恐る訊く。

「いや。クアドリガ、しかも墮天種はかなり手強い相手だ。お前1人じゃ確實に死ぬぞ」

ジークムントは、それだけしか言わなかつた。しかし、ジークフリートは理解した。

クアドリガ墮天が弱いんぢやない。スルトが強すぎるのだと。

「おつと、気づかれたようだな」

スルトが、メリ親子がいる高台の方を向いた。左前腕部は、再び炎に包まれている。

ジークムントが、手元にある自分の神機 旧型ロングブレード系の「グラム」を手に取る。

ジークフリートも、自分の神機 新型のロングブレードノアサルトの「ノートゥングノバルムンク」を握りしめた。

「ようこそ、本物の戦場へ」

同じ頃、近くの崖の上には1人の老人が立つてゐる。
並外れて長い白髪と白鬚で、純白の長いローブを着ていて、木彫りのまつすぐな杖をついてゐる。その顔は、見定めるような真剣な面持ちだ。

「ここの勝負、果たして軍配はどう上がるかのう…？」

- 続く -

第2話 焰帝スルト（後書き）

（注）ここで出てきている人物やスルトは、ゲーム本編には実在しません。あと、フーンリル本部の場所はあくまでこちらの創作です。

第3話 極寒の大地、灼熱の巨人（前書き）

任務中はちゃんと防寒装備で～す

ジークフリート・メリ (Siegfried Meri)

声 - 大塚明夫

世界初の新型神機使い。25歳。父親であるジークムントと対立する事が多く、周りから冷や冷やされている。しかし、ヨトウニから真実を聞いてジークムントに対する考え方を改め…
ぼさぼさの金髪。（キンぱつ）黒の略式制服を着ている。

使用神機は新型の可変式（ロングブレード／アサルト／バックラー）の「ノートゥング（Notung）／バルムンク（Balzung）／ドラウプニル（Draupnir）」。

1人称は「俺」、2人称は「あんた」。

ジークムント・メリ (Siegmund Meri)

声 - 大塚周夫

ジークフリートの父親。53歳。（がんじいってつ）頑固一徹で、感情を表に出す事が苦手。かなり古くから参戦していて、『ウールヴヘジン（Wolf he?innu / Ulfhedin）』の二つ名を持つ、ファインランド屈指の猛者。

後ろに流した長めの金髪を、ヘッドバンドで押さえている。白の指揮官制服を着ている。

使用神機は旧型の近接式（ロングブレード／シールド）の「グラム（Gram）／アンドヴァラナウト（Andvarinaut）」。

1人称は「私」、2人称は「お前」。

モデルは、「メタルギアシリーズ」のソリッド・スネーク。

エリック・ヨトウ（Erik Jotuni）

声 - 島田敏 しまだ びん

フィンランド本部に務める神機使い。52歳。ジークムントの同期である古参だが、実力は劣る。オヤジギャグを連発して呆れられているが、これは彼なりのコミュニケーション方法なのだそうだ。しかし、眞面目な話をする時は普通の口調で話す。

ステレオタイプな禿げ頭。は緑の狙撃制服を着ている。使用神機は旧型のスナイパー系神機（ノルスピッシュイ（Norupussy））の「フロツティ（Hrottzi）」。1人称は「僕」、2人称は「君」。

グスタフ・アドルフ・ハインリッヒス（Gustav Adolf f Heinrichs）

声 - 山崎たくみ やまざき たくみ

フェンリルの本部長。55歳。ジークフリートが「猩爺」と言う事から、抜け目が無く狡猾なのだろう。

栗色みがかった金髪を短く切り揃えている。スーツの上に着ている白コートには、金モールの肩章が追加されている。

1人称は「私」、2人称は「君」。

フレデリック・エーデルフェルト（Frederick Ede

lf e1t）

声 - 沢木郁也 さわき いくや

ハインリッヒスの執事。64歳。

肩まで伸ばした白髪と白い口髭。わたくし燕尾服とボータイが普段着。

1人称は「私」、1人称は「貴方様」。

？

声 - 永井一郎 ながい いちろう

老人の姿をした謎の存在。

並外れて長い白髪と白髭。純白の長いローブを着ている。木彫りの

まつすぐな杖をついて歩く。

スルト (Surt)

体長4mはありそうな人型の未確認アラガミ。表皮は常に発火しているため、並大抵のものは触れる前に溶けてしまうが、氷属性の爆発系弾が当たると一時的に炎が消える。捕喰する時にはのっぺりした顔が変形して前に長い顎になる。

モデルは「とある魔術の禁書目録」で出てきた『魔女狩りの王』。顎はティラノサウルスをイメージした形で、ザイゴート1体なら一呑みする設定。

第3話 極寒の大地、灼熱の巨人

「昨日に例の奴の犠牲となつたある一等兵 まあ、今は二階級特進して兵長だが。彼の命懸けの戦いのおかげで、対策が立てやすくなつた。

まず、奴は氷属性に弱い。例えば、氷属性の爆発系弾が当たると同時に炎が消える。両名は刀身を氷属性のものに、装甲を対炎使用に換装して、ジークフリート・メリは氷属性の銃弾も持つておくよう。

次に、奴には発火しない表皮もある。奴は捕喰する時に、平坦な顔が変形して前に長い…ちょうど、かつて存在したティラノサウルスのような顎になる。ここは炎が消えた表皮同様に、刀身へのダメージ無しに剣戟が通る。今は亡き兵長の神機の刀身の熔け残りに奴の血痕が付着していた事が、それを証明した。

……これが最後の命令になるかもしない。心して聴け……」

本部長が説明した内容を脳内で反芻し、ジークムントは吸つていた紙巻き煙草を携帯灰皿に強く押し付けて消した。中には、大量の吸い殻が詰まっている。

スルトがじりじりと迫る。熱気もじりじりと迫る。近くに投げ出されたクアドリガ堕天の亡骸は、とつに崩れていた。

親子は減光フィルターがあるゴーグルをかけ、それぞれの神機を構える。右手首に着けられている赤い腕輪 「P53アームドインプラント」の接続口に、神機のメインユニットにある核から伸びた黒い触手が繋がる。一瞬ちくりとするのだが、2人共それにはもう慣れている。「慣れ」というものは、意外と怖いのだ。

ジークムントの神機「グラム」は、ロングブレードを冷却ブレード真に交換してある。ジークムント自らが強化したブレードの1つだ。ジークフリートの神機「ノートゥング」は、ロングブレードを冷却ブレードに、バックラーを対属性バックラーに交換してある。どちら

らも、本部長から特別に支給されたものだ。

「…覚悟は、できているな？」

「…答えるまでもねえよ…」

ジークムントが言つ「覚悟」は、「相手を殺す覚悟」ではない。

「自分の命を捨てる覚悟」だ。

2人は互いに励ましたから、本部長の命令を再び脳内で反芻する。

「スルトを討ち、両名とも生きて帰れ」

まず、ジークフリートが突進する。冷却ブレードに換装した「ノートゥング」を横に構えて。

スルトが、手首から先が無い左腕を振り下ろす。それをジークフリートが、刃を振り上げてぶつた斬つた。

切り口から鮮血が噴出し、スルトが苦痛の叫びをあげる。火が灯つていた左肘から先は、地面に落ちてすぐに崩れ去つた。

ジークフリートはふと、刃から熱を感じ取つた。あまり躊躇せず触るのだが…

「熱つ！！」

信じられない事に、冷却ブレードが火傷しかねないほど高温に熱されていたのだ。手袋のおかげで火傷も軽微なもので済んだが。

しかし、何はともあれ隙を見せた事に変わりは無い。

スルトが、炎に包まれた右腕を大振りする。狙いはもちろんジークフリート。右ストレートが放たれた。早くて避けきれない。もうダメかと思つたその時だ。

ジークフリートの前にジークムントが立ちはだかり、「アンドヴァラナウト」と名付けたシールドを展開する。それでスルトの右ストレートを受け流し、冷却ブレード真で右胸を貫いた。このカウンターアタックは、刃が大きいバスター・ブレードや、攻撃力が劣るショートブレードにはできない。ロングブレードと堅固な装甲がそろつていてこそできる芸当だ。

冷たい刃が引き抜かれる。右胸を抉られた巨人が悶える。ジークフリートは、父親の想像を絶する強さに啞然としていた。

一方のジークムントは、自分の冷却ブレード真を触る。温い。

そして、ジークフリートに向き直つてこう言つた。

「ジークフリート、お前は氷属性の銃弾で援護しろ」

「は!? 何で俺が援護を…」

「ただの冷却ブレードでは、奴の高熱には耐えられない。私の冷却ブレード真ですら、ようやく温い程度だ。しかしこつちは、こまめに冷やせばしばらく保つ。格闘戦は任せておけ」

いつもジークフリートなら、今思えばつまらないと感じるブレイドを振りかざし、指示をわざと無視して突進するだろつ。

しかし、今回は勝手が違う。先程コトウニが父の真意を教えたので、逆らう気になくなっていた。「従わなかつたら死ぬかもしぬない」、そう思つたからだ。

「……分かつたよ」

そう言つてからジークフリートは引き下がり、神機を銃形態に変形した。機能停止した冷却ブレードが縮められ、代わりに機関砲の銃身が伸びる。この間、僅か1秒。

新型神機は、格闘武器と射撃武器に変形できる。それ故に、完成当初の期待もかなりのものだつた。

さて、ジークムントが冷却ブレード真で斬りつけ、ジークフリートが「バルムンク」で冷気ノーマルのバレットを撃つて、スルトに太刀打ちしている。本当に、『素晴らしい』としか言つようが無いチームワークだ。

幸い、スルトは遠距離攻撃をしてこない。いや、あるいは遠距離攻撃の手段が無いのかもしれない。ともかく、右腕と肘から先のない左腕で力任せに殴つたりしているだけだ。

ジークムントは巨体から繰り出される連撃を紙一重で避けつつも、冷気ノーマルのバレットが当たつて炎が消えた部位に的確に切り傷をつけていく。

戦いは、メリ親子が優勢に見えた。

と、不意にスルトが体の向きを変える。そして、援護射撃をしていたジークフリートに突進しだした。右腕を大振りしている。

「危ない！！ 装甲で防げ！！」

聞いたジークフリートは、急いで銃形態から剣形態に変形して、装甲「ドラップニル」を開いた。間一髪で、スルトの炎を纏つたストマックブローを防げた。反動で後ろへ吹つ飛ぶも、転ふまいと必死で踏ん張るジークフリート。

が、突然足場が滑りやすく感じたかと思うと、次の瞬間には仰向けに転んだ。分厚いフードのおかげで、後頭部は無事だ。

「痛つてえ…何でここ滑るんだよ…」

続きを言いかけ、ジークフリートはある事を理解した。そして、少し離れた場所にいるジークムントに、携帯端末を使って通信を入れる。

「俺がいる所までスルトを誘導しろ！！」

「！？ 何を考えている！？」

「いいから早く！！」

上手く事が運んでくれればいいのだが。

ジークムントは、刃をわざと掠らせて挑発している。剣士だろうと道化師だろうと、いい技術を持っているからこそ、わざと失敗できるものだ。

「こつちだ！ 足元に気をつけろ！！」

「…！ …なるほど」

息子の作戦を理解したジークムントは笑みを浮かべ、滑つて転ばないように速度を落として、慎重にジークフリートに接近した。

その後ろから、燃え盛る巨人が重厚な足音を響かせて近づく。親子が立つ場所に、スルトが足を踏み入れる……

と、辺りが一気に暗くなつた。スルトの姿が消えた。

実は、スルトが誘い出されたこの場所は凍つた湖。氷が熱に耐え切れず溶けだして、その中にスルトが転落したのだ。

「この量の冷たい水の中なら、きっとアイツも燃えないだろ?」
聞こえるのは、風の音だけだ。ジークムントは「グラム」の切つ先を足元に下げる、氷にできた穴に歩み寄っている。と、出し抜けに笑い声が聞こえた。

「…フフッ…お前もやればできるじゃないか」

「何様だ、バーク」

「お父様だ、バーク」

「売り言葉に買い言葉」という言葉がピッタリな状況だが、2人共にこやかに笑っている。

誰もが、これで終わつたと思った。

しかし、そうは問屋とんやが卸おろさなかつた。

ヒヨロ長い腕が水底から出てきて、ジークムントの腹を掴つかんだ。水から出たそばから炎が上がる。

「うぐつ…がああああ…！」

腹が高熱で焼かれて、ジークムントが苦悶の叫びをあげる。水面からは、スルトの頭も出てきた。顔が長い顎に変形し始めている。「グラム」は掴まれた瞬間に手を離してしまつたので、反撃できない。喰われるのは、時間の問題だ。

だが、ジークムントはまだ諦めていなかつた。

ボディーアーマーの左上のポーチから、縦10cm直径7cmくらいの筒を取り出した。手榴弾のようだが、青い帯が入つていて、歯で安全ピンを銜くわえて引っこ抜き、口を開き始めたスルトの頭上に投げつけた。そして、こう叫ぶ。

「今だ…!! やれ…!!」

その声の直後。ジークフリートが、スルトへと走る。構えている神機のメインユニットからは、黒々とした顎のようなものが出ている。ブレデーターフォーム捕喰形態だ。この形態でアラガミを捕喰する事が、神機使いの別名「神を喰らう者」の由来となつていて。

青い帯が入つた筒が、轟音ごうおんをあげて破裂する。しかし、そこから解き放たれたのは炎ではない。 - 140 の液体窒素えきたいちうそだ。あれほど燃

え盛っていた炎が、一瞬で消え去つた。凍傷を起こしたのだろうか、
スルトが悶えている。

炎は消えた。チャンスは今しかない。

ପାଇଁ କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର

ジークフリートが雄叫びを上げて飛びかかる。スルトが顔を向ける。赤黒い顎がある頭を、黒い顎が覆い尽くす。

そして黒い顎は、赤黒い表皮がある体の胸のあたりまで一口で噛み切った。

半透明の氷の上に、真紅の鮮血が飛ぶ。赤黒い肩口も、平坦な腹も、燃え盛る右腕も、そしておそらく両脚も、跡形も無くボロボロと崩れ去った。

」うぐ」

「おい！ しつかりしらー！」

ジークフリートが神機を放り出し、瀕死の父親に駆け寄る。
1mほどの高さから氷の上に落ちたジークムントは、既に息も絶え
絶えだ。掴まっていた部分の防寒服は焼き切れ、肌があつた部分は
炭になつて鱗割れ^{ひびわ}している。背中は炭になつてはいないものの、タン
パク質が既に変質して白くなつてしまつてはいる。

「待つてろ！ すぐ助けを

「いや、いい……来たところで、間

携帯端末を取り出そうとしたジーケフリー^トを、ジーケムントが制する。

「可
で

「……ただでさえ人員不足なんだ、老兵一人のために手間かけさせるわけにはいかん……」

右胸のポケットを弄り、下半分が炭化している紙の小箱を取り出す。
中に入っている煙草は、ライターを使うまでもなく火がついていた。

そう言いながら、先が焼け焦げた煙草を銜える。紫煙が立ち上り、ジーグムントの顔が少し綻ぶ。だがこのままだと、最後の一服にないかねない。

「勝手に死ぬなっ！！ あんたにはまだ教わんなきやいけない事が山ほどあるんだよ！！」

「待て！！ こんな極寒の地で無理にリンクエイドをするなと言つたろ……」

ジーグフリートが自分の右手首についた『腕輪』を瀕死の父親の『腕輪』に近づけるが、ジーグムントは自ら『腕輪』を遠ざけた。リンクエイドを行う瞬間、生命エネルギーを分け与えた方は倦怠感と脱力感に襲われる。ただでさえ疲れ果てていて、ましてここは極寒の雪原。凍死してもおかしくない。

「それに……私にはもう……思い残す事は何も無い……お前は昔から……技能を真似るのが上手かった……だから……私の戦法も……しつかり習得できているはずだ……」

「つでもつ……あんたが死んだら何の意味も無いだろ！！」

「……『命長ければ恥多し』……私もそろそろ……身を引くべきなのかもしけんな……」

両者の頬を流れる涙は、寒さで凍り始めた。ジーグムントは、息子の左腕を掴んで続けた。

「生きろ……お前だけでも……！」

捻り出すようにそう言つたジーグムントの手は、既に死を覚悟した者の手つきだった。

「……つざけんな！！ 勝ち逃げなんて許さねえぞ！！」

ジーグフリートはそう叫びながらジーグムントの『腕輪』を押さえつけ、自分の『腕輪』をそれに宛がい、リンクエイドを試みようとした……

その時だ。

「あー、待たれい待たれい」

しわがれているがよく通る声が聞こえ、ジークフリートは一瞬鳴りを潜めた。

後ろを見ると、1人の老人がいた。並外れて長い白髪と白鬚で、純白の長いローブを着ていて、木彫りのまっすぐな杖をついている。

「…誰だ…？」

「残念じゃがどっちにしろ、このままでジーグムント・メリは助からんよ。ただでさえ、煙草を吸いすぎて肺がボロボロになつたのに、それに加えて内臓が悉く焼かれてしまつたからじゃ」ジークフリートは、どう言い返していいか分からず数秒間黙つていたが、ようやく返す言葉を見つけた。

「……じゃあ…どうすりやいいんだよ…！？」

老人は顎に指を当てて少し考へる素振りを見せ、こう続けた。

「確かに、普通にリンクエイドを行つたとて、持病までは治せんわい。…そう、普通にリンクエイドを行つたならば、のう」言い終わるとほぼ同時に、老人の左手の人差し指が鍼状に変形した。

「やや荒治療じゃが、どうか我慢してくれ」そして返答を待たず、鍼をジーグムントの臍があつた部分に突き刺した。ジーグムントが激痛で悶える。

「おい…！何やつてんだよ！？」

「治療じゃよ」

「はあ…？ これのどこが治療…」

咎めようとしたジークフリートだが、驚きでその先の言葉が出なくなつた。

炭になつて崩れていったはずの腹が、どんどん元通りの肌色になつている。変質して白くなつていたはずのタンパク質も元通りになつている。そして、老人が鍼状になつてている左人差し指を引き抜くと同時に、完全に再生しきつた。

「ふう…こんなもんかのう…」

「…な…何だ今のは…！？」

呆気にとられるジークフリートに、老人は説明し始めた。

「これはセイント細胞といつてな、儂が^{わし}念じるだけで様々なものを構築できるのじや。他にも、他の生命体に注入して、失われた細胞の代行もできるのじやよ」

言いながらも、左手から毛布を構築してジークムントの腹に巻きつけている。

「お前さん達は、来たるべき最終決戦のために生きていもらいたいのじやよ。せっかく助けた命、無駄にしてはならんぞ」
2人に背を向けて歩き去ろうとする老人だが、ジークフリートが慌てて呼び止める。

「待てよ!! あんたの名前、まだ聞いてねえぞ!!」

「儂の名前… そうじやのつ…」

立ち止まつた老人は、星が瞬く夜空をしばらく見つめ、それから答えた。

「…ワインモイネンじや」

ワインモイネン。ジークフリートは、老人が名乗つた名を小声で復唱した。と、近くから呻き声^{うめ}が聞こえた。見ると、ジークムントが息を吹き返していた。つい老人から目を離してしまつたジークフリートが顔をあげるが、そこには人つ子一人いなかつた。

「…………うつ…………あのご老公は…………？」

「…………見たのか…………!?」

「…………何を言つてる? ご老公の助けが無ければ、今頃私は死んでいたろうに…………」

たしかに、あの老人 ワインモイネンは実在したようだ。ジークムントの腹には、さつきの毛布もある。

「…………それにしても…………『勝ち逃げなんて許さねえ』とはビリーハう事だ……?」

「なつ…………」

あの時叫んでいた言葉は、しつかり覚えられていた。返答に困るジークフリート。そして……

「……悪かった…」

「…謝るな」

せっかく捻り出した彼なりの謝罪の言葉をジーグムントは遮り、こう続けた。

「お前に謝られたら、私も今までの態度について謝らなきや釣り合いか取れんだろう。私が謝りたくないから、お前も謝らなくて…」「ごめんっ！！ 今まで反抗的な態度とつてごめん…！」

「つ…！？ 謝らなくていいと言つただろ！？」

「俺が謝りたいから謝つてんだよ。いいだろ？」

こんな時でさえも意地を張りあつ親子だが、それで十分だった。2人の顔には、心からの笑顔が浮かんでいた。

だが、現実はそう甘くなかった。

出し抜けに咆哮が響き渡る。見ると、1体のオウガテイル墮天がこちらめがけて走つてくる。

2人の神機はいずれも、それぞれの手がすぐ届く所に無い。ただでさえ足が速いオウガテイル墮天が相手なのに、加えてこちらは体勢が体勢なだけにすぐ逃げられない。

万事休すか。

だがその時だ。並外れて大きな銃声とともに、オウガテイル墮天の頭が無くなつた。いや、「首の付け根から吹き飛んだ」と言う方が正しいだろう。

耳を澄ますと、上からローター音が聞こえる。白み始めている濃紺の空を見上げると、サーチライトを備え付けた小型輸送ヘリがホバリングしていて、ドアから口径20mmの銃身を持つ神機を携えた男がこう叫んだ。

「おう！ お待たセンチメンタルジャーーーー！」

それから数分後、メリ親子は狼を象つた紋章が刻印された輸送ヘリ

おおかみかたど もんじょう

の中にいた。座席に座る彼らの向かいには、2人の命の恩人　ヨ

トウニが座っていた。

「いやはや、「フロツティ」が撃たれてなければ今頃、私達はオウガテイル墮天の体内だつたな」

「やー、何の何の！！」

「フロツティ」は、ヨトウニが愛用している旧型スナイパー系神機の名前だ。かつてフィンランド軍が使っていた対戦車ライフルの愛称『象撃ち銃』の名を冠する、強力な狙撃銃である。

「そういうジーグムント、その毛布はどうしたんだい？」

「ごまかす事もできないし、そもそも隠し立てする必要も無いので、メリ親子は順序立てて説明する事にした。

本部長直々（じきじき）の『焰帝』ことスルトの討伐依頼、スルトとの死闘、その時にジーグムントが反撃にあつて内臓を焼かれてしまつた事……

「えつ、内臓焼けた！？ そりや悲惨や大黒堂（ヒサヤ大黒堂）…」

「だから…何でフィンランド人のあんたが…」

知っているんだよ。そう続けてツッコもうとしたジーグフリートだが、突然響いた笑い声に遮られた。

「あつはつは！！ 相変わらずあなたのギャグは面白いわね！！」

「おう！ ありが唐辛子！！」

声はコツクピットの方から聞こえる。カーキ色のパイロットスーツを身に纏い、バイザー付きのパイロットヘルメットを被っている。

「えつと……誰？」

「僕のかみさんだよ」

「初めてまして、マイラ・ヨトウニと申します。夫がいつもお世話になつてゐるようで…」

「世話になつてなんかいない」と言い返そうとしたジーグフリートだつたが、ジークムントの本音を教えてくれた件があるので、やめておいた。

さて、メリ親子は再び順序立てて説明し始めた。

ジークムントの捨て身の一手とジークフリートの捕喰でスルトを倒せた事、ジークムントが重傷故に一時は死を覚悟した事、謎の老人の出現、本人が「セイント細胞」と呼んでいたものによつてジークムントの致命傷が一瞬で治つた事……

「そりやタブランじゃないか！！」

「あつはつは……」

ヨトウーのリアクションを聞き、再びマイラが爆笑する。親父ギヤグの内容が理解できなかつたジークフリーは、こう訊き返した。

「……『タブラン』って何だ？」

「ふー……『タブラン』っていうのはね、コウイチ・タブチつていう日本の野球選手のランニングホームランの事で、『滅多に無い事』の例え… プフッ …」

呼吸を整えてから解説するマイラだが、やはり途中で耐え切れず笑い出してしまつた。

田淵幸一^{たぶち じゅいち}さんは、代わりに俺が謝つておきます。本当に申し訳ございませんでした。

そしてメリ親子の説明は、謎の老人がセイント細胞を使って毛布を構築してジークムントの腹に巻き付け、『ワイナモイネン』を自称してどこへともなく去つて行つた事を最後に終わつた。

ヨトウーはしばらく黙つていたが、10秒くらい後に唐突^{とうつ}にメリ親子をぎゅっと抱きしめ、こう言つた。

「まあともかく、無事帰つてきて本当に良かつた……」

抱きしめたヨトウーも、抱きしめられた親子も、生きている事に感動し^{むせ}び泣いていた。コックピットで3人のやり取りを聞いていたマイラも、目頭^{めがし}が熱くなつていた。

窓の外には、無事に生きて帰つた一行を祝福するかのよつて、朝日が輝いていた。

「しかし、神機の無断持ち出しに輸送ヘリの無断使用、間違い無く始末書だな」

「「あう…」

続く

第3話 極寒の大地、灼熱の巨人（後書き）

（注）「」で出てきている人物やスルトは、ゲーム本編には実在しません。あと、フンリル本部の場所はあくまでこちらの創作です。

P・S・：大きさ比較で不自然な事が分かつたので、クアドリガ墮天の捕食された部分を「頭+胴体」から「頭だけ」に変更しました。

P・S・のP・S・：体に悪いから、良い子は煙草なんか吸っちゃダメだぞ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7529w/>

GOD EATER BURST -Bond under wintry sky-

2011年12月19日20時48分発行